

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 1日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520368

研究課題名（和文） 文簡本を中心とした『水滸伝』の研究

研究課題名（英文） The *Shuihu Zhuan*, especially on the simpler-text versions

研究代表者

氏岡 真士 (UJIOKA MASASI)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：60303484

研究成果の概要（和文）：『水滸伝』の版本は一般に（文）繁本と（文）簡本に大別され、多くの研究者は前者を後者より重視している。結果的に百二十四回本や八巻本、十巻本、三十巻本など重要な版本の研究が進んでいなかった。本研究はこれら（文）簡本を中心に調査分析を行ない多くの知見を得たものである。注意すべきは金聖歎による七十回本の独擅場とされる清代にも（文）簡本が版を重ねていたことで、この事実は当時の読者層の二極化を示唆する。

研究成果の概要（英文）：The editions of the *Shuihu Zhuan* are generally divided into two groups, the fuller-text versions and the simpler-text versions, and many scholars set the former above the latter. As a result some important editions of the *S.Z.* such as the 124-chapter versions, the 8-volume versions, the 10-volume version and the 30-volume versions have been undervalued. We mainly researched these simpler-text versions of the *S.Z.* and reaped a rich harvest. It is noteworthy that the simpler-text versions went through many printings in the Qing dynasty when the 70-chap. versions edited by Jin Shengtan were very popular. This fact suggests the polarization of the readership in those days.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学

1. 研究開始当初の背景

『水滸伝』の版本を繁簡に大別したのは、魯迅である。彼は『中国小説史略』において、従来の胡適による『水滸伝』研究の成果を批判的に整理し、「繁本」よりも「簡本」が古いと述べた。そこでの問題意識は、金聖歎の七十回本が自称どおり「古本」に由来するか

否かという点から始まっており、したがって七十回本は繁簡いずれにも含まれていない。しかも両氏の見たテキストは数点に留まり、あくまで便宜上の分類であった。

ところが鄭振鐸は、パリで新たに幾つかのテキストを実見したうえで、「簡本」は『水滸伝』の原本および同規模のテキストであり

「繁本」はその増補版であると断定した。いっぽう孫楷第は、東京での『水滸伝』諸本の調査結果を踏まえて、「文繁事簡本」こそが「文簡事繁本」に先行すると述べ、鄭に疑問を呈した。

孫はまた『水滸伝』のテキストを6大別したのであるが、やがて鄭・孫の所説が混交し、(文)繁本と(文)簡本とではどちらが古いか、斯界の大問題となり、魯迅・鄭振鐸は(文)簡本先行説、胡適・孫楷第は(文)繁本先行説と理解されるに至った。また金聖歎の七十回本は「古本」ではなく、(文)繁本の最終形態であると目されるようになった。

(文)繁本先行説は、白木直也や大内田三郎らの研究によって証拠が積み上げられてゆき、とくに日本では早くから通説となっていた。のちに馬幼垣はヨーロッパや中国に未知の(文)簡本が眠っていることを明らかにしたが、それらのテキストも繁本先行説を覆すものではなかった。

むしろ(文)簡本の成立に関する白木直也の所説が、“挿増本”と馬の総称するテキスト群から、資料的に補強された。(文)繁本のうち二十巻百回本に対して、田虎王慶故事五巻と各葉上部の挿絵を挿入・増補するかわりに、本文の字数を減らすことによって(文)簡本が成立した、というのが白木の見解である。その根拠はパリに蔵される“挿増”を称する一残本であった。ところが馬の博搜により、挿増本はヨーロッパ各地に残本が所蔵され、不完全ながら甲乙2種に復元できることがわかったのである。

しかも白木は、パリ残本が内容的に評林本より古いことも、余呈將軍についての描写から明らかにしていた。この点についても、挿増本は甲乙2種とも、1594年に刊行された現存最古の完全な(文)簡本である評林本よりも更に古いことが検証された。

2. 研究の目的

(文)簡本先行説が否定されたとしても、それで(文)簡本と呼ばれるテキスト群が無用の長物と化すわけではなからう。また『水滸伝』を繁簡に二分すること自体が、本来は便宜的な処置だったのであるから、その枠組みに留まることも研究上妥当ではあるまい。

じっさい再検討してゆくと、様々な課題が存在することに気付く。

一例を挙げれば挿増本の甲乙2種のうち、挿増乙本のほうが古いと目されるのだが、このテキストは全122回から成り、しかも本来は全123回あったと考えられる。

すると注目すべきは、かつて胡適や大内田三郎が研究材料に用いて、後者により(文)簡本の古い形に擬せられた百二十四回本の存在である。124-123=1と僅差であるから、百二十四回本が(文)簡本として古形を保つ

ている可能性を再検討する必要がある、挿増乙本の研究から生まれたわけである。

百二十四回本の重要性は他にもあって、このテキストは1879年の刊行とされるが、すると清末になぜこのような(文)簡本『水滸伝』が存在するのかが問題となる。つまり清代における『水滸伝』といえば、(文)繁本の最終形態と目される金聖歎の七十回本の独擅場と考えるのが一般的だが、そのような通説との整合性を問い直さねばならない。ところが、この百二十四回本を目睹する機会は意外に少ないため、その意味でも検討に値する。

研究代表者は本研究の開始以前に、ヨーロッパ各地に所蔵される中国書を調査するプロジェクトに参加する機会に恵まれ、また関係各位のご厚意にも支えられて、(文)簡本のうち挿増本や嵌図本など貴重な資料を検討することができた。

そこで日本や中国に現存する『水滸伝』をも対象に加えた研究を志した。資料を閲覧収集して分析を加え、その結果をヨーロッパのテキストに関する知見や、相対的に研究が進んでいる(文)繁本に関する成果などと総合することによって、『水滸伝』テキスト間の相互関係を新たに整理し、関連の諸問題についても考察を進めることを、研究の目的としたのである。

3. 研究の方法

日本や中国など各地に所蔵される『水滸伝』について、(文)簡本を中心として資料の閲覧や収集を行ない、並行して新たな所蔵先の掘り起こしに努めた。

(文)簡本以外では、宮内庁書陵部や多久市郷土資料館、また無窮会専門図書館や天理図書館、北京の中国国家図書館などに蔵される不分巻系の(文)繁本を重点的に検討したが、これは直接的には、後述する三十巻本の底本を探るためである。

資料については本文校勘や版式・挿絵・眉批・旁批などの比較対照はもちろん、補修の有無や程度を観察し、あるいは封面や版心などから出版者・地域に関する知見を得て、その特徴や出自などについても可能な限り明らかにした。

そのうえで従来の情報を加味して『水滸伝』各系統の関係を跡付け、関連の諸問題についても考察を進めたのだが、その際には『三国志演義』など同時期に多数刊行された関連作品に関する研究成果や、広く明清時代の目録学的蓄積なども吸収できた。

4. 研究成果

まず百二十四回本については、1879年刊行の大道堂本を信州大学附属図書館に収蔵したうえで調査することができた。これは国内

では恐らく唯一のテキストであろう。中国には別バージョンも含めて少なからず所蔵されており、たとえば北京にかぎっても、中国国家図書館や首都図書館、北京大学、清華大学、人民大学、中国社会科学院文学研究所などの収蔵品となっているが、今回調査した限りでは、大道堂本をもって百二十四回本を代表させて良い。

さてこれが(文)簡本の古形を保っているか否かが前述のように問題になるが、結論は否定的なものとなった。本文の総字数が通行の(文)簡本の約3分の2程度で、記述が全体に簡略な点では古拙の趣があるが、余呈將軍の描写などからみて、挿増本より遡る内容とは考えにくい。

ただし全124回という構成については、古い(文)簡本の目次に由来する可能性がある。というのも現存するテキストは19世紀の刊本ながら、まず序文が乾隆年間(1736-1795)の年号をししば有する。この時期には英雄伝奇小説のリニューアルやリメイクが多数なされており、そのような動きの中に百二十四回本『水滸伝』を位置づけても不自然ではなからう。ちなみに後述する『漢宋奇書』や『征四寇』もこの時期に登場する。のみならず百二十四回本の本文を検討すると、その底本は百十五回本『水滸伝』のうちでも早期のものだと考えられる。このことは、序文がししば撰者として康熙年間(1662-1722)ごろの陳枚の名を挙げることも無関係ではあるまい。果たして然らば、百二十四回本の成立は相当早く、それが長期にわたって読み継がれてきたことになる。このことは、金聖歎の七十回本登場で『水滸伝』の歴史は一段落というような通念に、疑問を抱かしめる一例である。

ではその底本たる百十五回本『水滸伝』とはどんなテキストか。じつはこの点も重要である。百十五回本としては、かつては『漢宋奇書』本が、最近では劉興我本が、多く研究材料とされてきた。しかし両者は、そしてそれ以外の全115回を謳うテキストは、すべて同一視して良いのか。この点は従来未検討であった。

このうち劉興我本は嵌図本の種類だが、嵌図本は独特の上図下文形式を採る福建系のテキストと見られ、とくに劉興我本は1628年つまり明末の序文をもつ。いっぽう『漢宋奇書』は『水滸伝』と『三国志演義』を上下二段に並行して掲載する書物だが、これは乾隆年間以降に版を重ねたテキストであって、劉興我本より100年以上も新しいことになる。ところが両者を対校した結果、互いに入りがあって甲乙つけ難いことがわかった。すなわち両者は、共通の祖本から分かれ出た二つの系統と目されるのである。

後者の『漢宋奇書』本の系統には、北京中

国国家図書館蔵の十巻本や佐賀大学附属図書館蔵の英雄譜本などがあり、しかも相対的に古い内容を保つことがわかった。ただし最古と目される十巻本は破損が多く、いっぽうで『漢宋奇書』本との差異は、嵌図本との出入りに比べれば僅かなことも明らかになった。

『漢宋奇書』本から後半のみを独立させたと胡適が認め、亜東図書館『水滸続集』に収められたのが『征四寇』である。これについては、北京やパリにある乾隆年間の清刊本や清末民国初における石印本のうち上海進歩書局本などを調査分析し、百十五回本を中心とした他のテキストとの関係を明らかにすることができた。すなわち『征四寇』の底本は『漢宋奇書』の前身ともいべき佐賀の英雄譜本であり、また『征四寇』のテキストとしては進歩書局の石印本も比較的信頼できる。いっぽう亜東図書館の活字本は、『漢宋奇書』の百十五回本をもとに石印本『征四寇』を参照して新たにテキスト化されたもので、残念ながら『征四寇』のテキストとしては依拠しがたい。ただし亜東図書館本が参照した石印本は進歩書局本ではないと考えられ、したがって清末民国初の出版事情を考えるうえで亜東図書館本も重要な資料である。

ところで全115回を謳う『水滸伝』テキストとしては、もうひとつ八巻本が存在し、南京図書館や北京大学、人民大学、天津師範大学などに収蔵される。管見の限りでは基本的に同じもので、封面だけが異なるが、それによれば1825年の重刊を経て1902年になっても刊行されていることがわかる。表題や回目などの類似性から十巻本との関連が窺えるものの、本文の分量は約3分の2に縮約されており、しかも記述のありかたは百二十四回本とも異なる。

このように本文の規模が他の(文)簡本の約3分の2というテキストは、さらに三十巻本がある。これまた記述のかたちが異なるが、のみならず『水滸伝』のなかでは異端児とも呼ぶべき存在である。

三十巻本は東京とパリに3種が存し、東京の2種は完本ながらパリ残本の後修本と見られるが、本文に大きな異同は無いので一括して扱うことが可能である。その底本は、田虎王慶故事の部分が評林本前段階の未知の(文)簡本と目される以外は、すべて内閣文庫蔵本系の容与堂本であることがわかった。

これが意味するのは、三十巻本を研究上(文)簡本とは見なせないということである。前述の白木直也の所説をふまえれば、二十巻百回本と田虎王慶故事五巻から生まれたのが(文)簡本の元祖であった。そして三十巻本以外のいわゆる(文)簡本テキストは、すべてこの元祖の直系の子孫ともいべき継承関係が認められる。やや単純化すれば、挿

増本から百十五回諸本を経て、一方で評林本や二刻英雄譜本に至り、他方では百二十四回本や八巻本また『征四寇』へと枝分かれするが如くである。ところが三十巻本だけは、内閣文庫蔵本系の容与堂本と評林本前段階の失われた(文)簡本とから、一気に顕著な簡略化と独自の加工を施されている。つまり元祖(文)簡本との関係が、田虎王慶故事以外では認められない異端児なのである。

いっぽうで総分量から考えれば、三十巻本には百二十四回本や八巻本との親近性がある。そこで、これらを“縮約本”として一括し、(文)繁本・(文)簡本と鼎立させる分類が可能になる。この分類の有効性は、縮約本が清代に版を重ねたことと密接に関わる。当時の出版競争の激しさが、いわゆる繁簡2種のみならず、このようなタイプの『水滸伝』をも大きく育てたのだと把握できるからである。

そもそも清代の『水滸伝』といえば、金聖歎の七十回本の独擅場と考えられがちであった。だがそれでは、当時の読者がすべて金聖歎流の(文)繁本テキストを読む手間を厭わず、かつ金聖歎が“腰斬”した好漢108人勢揃い以降のエピソードを一顧だにしなかったことに成りかねない。そうでないことは、従来から『漢宋奇書』や『征四寇』の存在が示唆するところだったが、新たに縮約本各種の存在や、さらには『漢宋奇書』・『征四寇』の前身たる十巻本・佐賀本の存在を意識すれば、七十回本の読者とは異質な読者群の存在が、さらに強く窺える。

清代における金聖歎“腰斬”本の独り勝ちという印象は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて普及した石版印刷本に由来するであろう。嚴敦易や丸山浩明の研究が示唆するように、多数の石印本が『水滸伝』のテキストとして採用したのは七十回本であり、残りは『征四寇』であった。胡適が『水滸伝』研究を始めたとき彼の手元にこの2種しか無かったことも、それと無縁ではあるまい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

①氏岡真士, 《征四寇》遡源, 人文科学論集<文化コミュニケーション学科篇>, 第46号, 49-68, 2012, 査読有

<http://hdl.handle.net/10091/15660>

②伊藤加奈子, “替~”を用いる中国語の感情表現について, 人文科学論集<文化コミュニケーション学科篇>, 第46号, 31-47, 2012, 査読有

<http://hdl.handle.net/10091/15663>

③氏岡真士, 三十巻本『水滸伝』について, 日本中国学会報, 第63集, 95-109, 2011, 査読有

④氏岡真士, 試探百二十四回本《水滸》的底本, 人文科学論集<文化コミュニケーション学科篇>, 第45号, 1-17, 2011, 査読有

⑤伊藤加奈子, 可能表現の使用に関する日中比較, 人文科学論集<文化コミュニケーション学科篇>, 第45号, 19-33, 2011, 査読有

<http://hdl.handle.net/10091/12808>

⑥氏岡真士, 兩種“出像”本《水滸》在百十五回諸本中的位置, 中国古典小説研究, 第15号, 89-106, 2010, 査読有

⑦氏岡真士, 「牡丹灯記」と『牡丹亭』, 人文科学論集<文化コミュニケーション学科篇>, 第44号, 135-149, 2010, 査読有

⑧伊藤加奈子, “突然”の意外性, 人文科学論集<文化コミュニケーション学科篇>, 第44号, 41-54, 2010, 査読有

<http://hdl.handle.net/10091/10057>

⑨氏岡真士, 百二十四回本『水滸伝』について, 汲古, 第56号, 24-29, 2009, 査読有

[図書] (計1件)

氏岡真士, 研究成果報告書別冊, 文簡本を中心とした『水滸伝』の研究, 2012, 119頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

氏岡 真士 (UJIOKA MASASI)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号: 60303484

(2) 研究分担者

伊藤 加奈子 (ITO KANAKO)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号: 80293489

(3) 連携研究者

()

研究者番号: